



Title	スリングショットと事実 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	崔, 昌鳳
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11590号
Issue Date	2014-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57711
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Chang-Bong_Choi_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 崔 昌 鳳

主査 教授 山田友幸
審査委員 副査 教授 千葉 恵
副査 教授 小野芳彦

学位論文題名 スリングショットと事実

本論文は、その単純さと破壊力から「スリングショット」と呼ばれている一群の論法がもたらす、事実の概念をめぐるパラドクスの解決を目指すものである。事実の概念は、物事の理解の根本に関わる概念であるが、スリングショットは、内容の異なる様々な真なる言明に対応する多様な事実の区別を否定し、たまたま真である任意の言明が、そもそも何かに対応するならば、みな同じ単一の「大いなる事実」に対応するという、事実概念にとって壊滅的な結論を導く論法である。

この論法は、哲学者デイヴィドソンが、言語表現に何らかの存在者を割り当てるような意味論を批判するために利用したことにより注目されるようになった。デイヴィドソンは、文中の埋め込み文と論理的に等値な文との交換と、同じ対象を指す指示表現どうしの交換を行っても文の指すものは変化しないということを前提して上述の結論を導いている。また数学者のゲーデルは、イオタ演算子を用いたイオタ変換およびイオタ置換と呼ばれる推論規則だけによるスリングショットを提示している。

スリングショットを受け入れがたいと考えた哲学者たちは、この論法を途中で遮る理論を提案してきた。しかしそれらの理論は、事実を文と同程度にきめ細かく個別化するため、異なる文が同じ事実を表現していると思われるケースでも、表現されている事実が異なると結論せざるを得なくなる場合がある。崔氏は、この過度の細分化に満足せず、議論の形式化の正しさをどう判断するかという、より一般的かつ根本的な観点まで立ち戻り、パラドクスの解決を与えようとするのである。

本論文では第3章で、論理的等値性を文の指示対象の同一性条件とすることに反対するバーワイズとペリーの議論がデイヴィドソンのスリングショットの回避に有効であることが確認されたのち、ゲーデルのスリングショットに焦点が絞られる。また第4章で、非形式的議論の妥当性判断と形式的議論の妥当性判断が衝突する場合に退けられるべきは形式的議論の方であるとするバウムガルトナーの観点が紹介され、支持される。

ただし崔氏は、イオタ変換を認め、余剰な論理的構造を持ち込まない形式化においてのみイオタ置換を認めるというバウムガルトナーの提案にも、この観点から再検討を加える。その準備として第5章で、非形式的議論の形式化の一般的手順が定式化される。それによれば、まず形式化の対象とする非形式的議論の集合を特定して、それらについて非形式的な妥当性判断を行い、含意関係をもつ文の組み合わせの集合の形で結果を記録する。次に議論の前提や結論の文中で共有されている構成要素に注目して議論の形式を抽出し、それに基づいて推論規則の集合を構成して、先に得られた記録と比較する。この比較により、非形式的妥当性判断に照らして形式化の正しさを判定するのである。

この準備に基づき第6章では、ペリーの規準とバウムガルトナーの規準に、新たに崔氏が考案した4つの規準を加えた合計6つの規準が、7つの議論からなる議論集合を特定したうえで、それらについて非形式的妥当性判断と形式的妥当性判断の衝突を生じさせるかどうかという観点から、網羅的に比較検討されている。その結果、外延的文脈におけるイオタ置換適用前後で、対象同定条件に共通要素が残る場合に事実同一性文脈へのイオタ置換を認め、因果関係に本質的に関与している性質が保存される場合のみ、事実因果文脈に対するイオタ置換を認めるという崔氏の考案した規準の一つと、ペリーによる確定記述句の二種類の読みに応じた規準の使い分けの二つだけが、すべての事例で非形式的な妥当性判断と衝突しない形式化を与えることと、前者の規準がペリーの規準の使い分けの一般的指針を与えることが示される。しかも6つの規準はみな、単称因果言明によるゲーデル版スリングショットを回避できることも確認されている。それにもかかわらず形式化の適切性に関して差が出ることは、スリングショットを回避するだけでは問題の根本的解決にはならないことを再確認させるものであり、本論文が形式化の正しさをどう判断するかという一般的、根本的観点から解決に取り組んだことの重要性を見事に示す成果である。

ただし本論文にも論じ残した点がないわけではない。本論文は非形式的な議論に関する非形式的な妥当性判断に依拠しているが、この種の判断は会話の含みの影響を受ける場合がある。この点の語用論的観点からの検討を補うならば、本論文の意義はさらに明確になると思われる。しかしこの点は本論文の成果の価値を損なうものではなく、本審査委員会は、全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。